

第2回第7次福島県総合教育計画策定に関する懇談会 議事録

日 時 令和2年8月19日（水）
午後1時30分～午後3時35分

場 所 杉妻会館 3階 百合

福島県教育庁教育総務課

1 出席者

(1) 第7次福島県総合教育計画策定に関する懇談会委員 計14名

青砥和希委員、安斎康史委員、内田広之委員、小野広司委員、黒川佳子委員、小檜山宗浩委員、齋藤雄一郎委員、高瀬芳子委員、丹野香須美委員、成澤勝蔵委員、伴場賢一委員、伏見珠美委員、森涼委員、渡部早苗委員

(2) 福島県 計22名

教育委員会教育長、政策監、教育次長、県立高校改革監、庁参事、教育総務課長、財務課長、施設財産室長、職員課長、福利課長、社会教育課長、文化財課長、義務教育課長、高校教育課長、県立高校改革室長、特別支援教育課長、健康教育課長、教育総務課企画主幹兼副課長、他4名

2 内容

(1) 協議

- ① 目指すべき教育の姿について
- ② その他

3 発言者・発言内容

次のとおり

事務局 (田母神企画主幹)	<p>－開 会－</p> <p>開会に先立ちまして、御連絡いたします</p> <p>本日は、新型コロナウイルス感染防止のため、マスク着用にご協力いただきましてありがとうございます。</p> <p>換気のために途中休憩を取らせていただきます。傍聴、マスコミ各社にも御協力いただきまして、会場の人数制限をさせていただいております。ありがとうございます。</p> <p>次に、定足数の確認です。本日は14名全員御出席いただいております、本懇談会は有効に成立しておりますことを御報告いたします。</p> <p>それでは、ただ今より「第2回第7次福島県総合教育計画策定に関する懇談会」を開会いたします。</p> <p>本日、進行を担当します教育総務課の田母神と申します。よろしくお願いいたします。</p> <p>なお、教育長はじめ各課室長につきましては、後半部のグループワークの発表から傍聴させていただきたいと思っております。</p>
事務局 教育総務課長	<p>－委員紹介－</p> <p>はじめに、鞍田委員の御異動に伴いまして、新たに委嘱されました委員の方を、教育総務課長より御紹介いたします。</p> <p>教育総務課長の高瀬でございます。今回より新たに委嘱させていただきました委員を御紹介させていただきます。</p>
安斎委員	<p>安斎康史委員でございます。よろしくお願いいたします。</p> <p>よろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>－協 議－</p> <p>では、協議に移ります。</p> <p>本懇談会の議長は、設置要綱第5条により、座長となっております。本日も内田座長、よろしくお願いいたします。</p>
内田座長	<p>座長の内田でございます。</p> <p>6月に第1回策定懇談会が開催され、現状と課題について皆様から色々な御意見をいただいたところです。</p> <p>本日は、前回の議論を基に、現状と課題、将来の展望を踏まえ、今後の新たな教育計画の柱となるべく「目指すべき教育の姿」について、様々な視点から本日も御意見をいただきたいと思いますと考えております。</p>
教育総務課長	<p>実り多い懇談会となるように、委員の皆様には、積極的に御協議いただきたいと思います。</p> <p>まず始めに、本日の進め方ですが、後ほど御説明いたしますが、最初にグループ形式でグループごとに議論を深めていただく形になります。</p> <p>それに先立ちまして、協議の(1)目指すべき教育の姿に関して、資料を基に事務局から説明をお願いします。</p> <p>私から、配布させていただいた資料につきまして、御説明させていただきます。前回の会議で、御指摘をいただいた点を踏まえて、資料を作成いたしました。</p> <p>資料2を御覧いただければと思います。</p>

バックキャストで教育の構想を練るべきとの御指摘を踏まえまして、福島県の子どもたちがこれから直面すると考えられることについて、各種報告書を参考にまとめさせていただきました。オレンジ色の枠の部分が、日本社会全体で起こっていくこと、青色の枠の部分で福島県特有のことをまとめさせていただいております。

オレンジ枠内の大きな丸の1つ目ですが、人口の大幅な減少と高齢化が想定されています。3つ目のポツに記載されていますが、家族形態が変容していくことも予想されます。

大きな丸の2つ目ですが、日本を取り巻く国際社会の状況について、1つ目、2つ目のポツのとおり、国際社会も変化をし、人口増加等により世界的課題が深刻化することが予想されるとともに、3つ目のポツのとおり経済的な日本の地位も低下していくことが予想されています。

大きな丸の3つ目ですが、人工知能の進化により、ホワイトカラーの仕事の減少や、新たな職が生み出されることが言及されています。

青い枠の左側の部分ですが、福島県も急激な人口減少や、就業者数の不足等が予想されています。

一方で、右側の枠に記載のとおり、廃炉や除去土壌等の復興へ向けた課題は、30～40年単位で考えていく必要があります。また、再生可能エネルギーの供給も、今後増やしていく計画が立てられています。

このように、今後起こることの変化について、参考までにまとめさせていただきました。

次に、資料3-1を御覧いただければと思います。

前回、SWOT分析について資料を提示させていただきましたが、いただいた意見を踏まえ一部見直しをさせていただいております。

まず、内部環境と外部環境の分け方について御指摘をいただきました。どのような観点で分けるか事務局で検討しまして、左側の欄に記載のとおり、教育委員会や学校に関する教育環境を内部環境として、社会環境に関することを外部環境と定義し、一旦整理させていただきました。それに併せて、内容も一部見直しをさせていただいているところです。

2ページ以降をお開きいただければと思います。

強み・課題について、なぜこのような状況が起こったのか、事務局で考察させていただき、まとめさせていただいております。

強みの1つ目の家庭学習の関することですが、バックデータ集、資料3-2の35頁と併せて御覧いただければと思います。平成29年度より大きく増加傾向が見られますが、これは29年度から実施された家庭学習スタンダードの取組が影響しているのではないかと考えております。

また、3、4で問題行動の少なさについて記載しておりますが、全国と比較して核家族世帯割合が低いこと、3世帯家族割合が高いことが、一定程度影響しているのではないかと考えております。

3頁を御覧いただければと思います。

課題に関することですが、学力に関することは1～5のような指導上の課題、あるいは6に記載のような環境に関すること、意識に関することが考えられるのではないかと考えております。

4ページ以降は、恐れ、機会として記載させていただきました社会環境が、どのように教育に影響するのかをまとめさせていただいております。こちらも御参考にし

ていただき、不十分な箇所については御指摘いただければと考えております。

資料3-2は、3-1のバックデータとして併せて御覧いただければと思います。続きまして、資料4に関してでございます。

資料4につきましては、本日目指すべき教育の姿について議論していただくに当たりまして、前回いただいた御意見とそこから見えてきたものを、事務局にてまとめさせていただきました。

まず1番ですが、人物像、育むべき資質・能力について、様々な御意見をいただきました。その中で、復興・創生、地域を担っていくという観点と、自分の人生を切り拓くという両方の観点の御意見をいただいたと考えております。

また、自己肯定の必要性を多くの委員からいただきました。一方で、同時に他者への寛容も必要との意見もいただきました。

加えて、学力に関すること、コミュニケーション能力や創造性・主体性、困難があってもやり抜く力の育成など、様々な子どもたちに育むべき資質について言及いただきました。

次の頁をお開きください。学びの環境に関することでございます。

(1)総論といたしまして、大学と教育委員会、小中高大の連携など、関係機関との連携について、様々御意見をいただきました。また、将来を見据えて教育を変革する必要性ですとか、新型感染症の影響をきちんと踏まえること、それから、震災後の取組が強みになっている部分もあるのではないかと、といった御意見をいただきました。

(2)学校と地域の協働についても、多数御意見をいただきました。それに関連して、課題解決を通じた成長の重要性についても御意見いただいたところです。

(3)教師についてですが、資質向上、モチベーションに関することなどの御意見をいただいたと思います。

続きまして、(4)ICTについては、様々な観点でICTを使うことができる可能性について言及いただきましたし、これまでの学校の良さを踏まえた活用の仕方について言及いただきました。

また、(5)個々の生徒に応じた対応ということで、特別支援や不登校生への対応について、きめ細かな御意見をいただきました。

(6)社会教育等の部分ですが、学校だけではなく様々な場で学んだり、体験したり、人と接したり、といった場の充実の必要性について、御意見をいただいたと考えております。

なお、柱立てや、見えてきたものとして記載した部分については、前回の御意見を踏まえまして事務局で便宜的にまとめたものですので、本日御意見をいただく際には、これに囚われずに、幅広い観点での御意見をいただければと考えております。

前回の会議の際に、10年間という計画期間について長いのではないかとという御指摘をいただきました。これについて、事務局内でも様々議論をさせていただき、御指摘は仰るとおりであると考えております。しかし、今回の総合教育計画が、県の総合計画の部門別計画という性質上、県の総合計画の計画期間と合わせる必要があるため、10年間ということで策定を進めていただければと考えております。一方で、最新の教育課題等については、10年を待たずに取り入れていく必要があることは御指摘のとおりと考えておりますので、現在も毎年度下位計画である頑張る学校応援プランの改定を行っておりますので、次期計画についても頑張る学校応援プランのような、毎年度見直しを行う下位計画を策定することで、毎年度の教育課

内田座長

題を取り入れていきたいと考えております。

説明は以上でございます。

高瀬課長ありがとうございました。

ただ今、事務局から説明がありましたとおり、第1回懇談会での各委員からの御意見から色々と見えてきたものがあります。

本日は、先ほど説明いただいた将来像や現状分析を参考といたしまして、目指すべき教育の姿につきまして、更に幅広く検討していきたいと思っております。

まずは前半部といたしまして、これから30分間程度で、グループワークを行いたいと思っております。各グループに準備された付箋紙、模造紙がございますので、それらを活用しまして、模造紙にまとめながら議論を深めていただきたいと思います。各グループごとに代表を1名選んでいただき、休憩をはさんだ後になりますが、それぞれのグループの代表から3分程度で発表をお願いしたいと考えております。

その後、後半部としまして、前半部の内容を踏まえながらですが、お一人ずつ御意見をいただきたいと思っております。全員の方から御意見をいただきたいと思っておりますので、短時間になりますが、お一人お一人御指名させていただきながら意見をいただきたいと思っております。

なお、グループワークに関する議事録につきましては、各グループの代表により発表をいただくと先程申しましたが、その発表の内容を記録・公表することを以って代えさせていただきますので、御了承いただければと思っております。

それでは、それぞれグループごとに議論を始めていただければと思っております。時間が来ましたら、私の方からお声掛けさせていただきます。よろしく願いいたします。

(各グループごとに議論)

それでは、まだ議論が盛り上がっているとは思いますが、時間となりましたので、ここで一旦休憩といたします。発表は、14時25分開始といたします。この後事務局の方で机の移動を行いますので、お荷物の移動等に御協力ください。

(座席移動及び換気)

それでは、時間となりましたので、後半を開始いたします。

ワークショップが非常に盛り上がりまして、本当に時間も足りない位でした。是非、後半はじめに、グループの発表内容を皆さんで共有させていただきまして、それぞれの委員からの意見発表につなげてまいりたいと思っております。各グループの代表の方から、3分ずつ発表をお願いいたします。時間も限られていますので、短い時間で恐縮ですが、よろしく願いいたします。それでは、まずA班から、A班は黒川委員が代表と伺っておりますので、よろしく願いします。

黒川委員

あさか開成高校の黒川と申します。A班で話し合ったことについて、発表します。いろいろ出たのですが、既にコンピューターで勉強すると、2、3問の解答からその子どもがどの位のスキルを持っているか、どのような勉強をさせたらよいか、個別最適化した学びができるようになっていく。10年、30年後を考えたときに、教員が持つスキル、教育が目指すもの、どちらかわからないが、今まで教員や学校教育が担ってきた知識を教えることが、もしかしたらAIが担う。そして、教員が持つべき力とは、その知識を活用したり、思考力・表現力・判断力や、意欲を持たせるようなAIにできないこと。本当に一人一人にあったコミュニケーション、結構教員が何を言っているかわからず、子どもに話が伝わらないことも多いので、相手の人が分かるコミュニケーション力をつけるというような、AIが担えない、今

まで知識の伝達を主眼に置いてきた学校教育や教員の役割を大きく変えていく。それには大きなエネルギーがいることだが、それを目指さなければならない。

具体的には、例えば、調べてくるのはA Iやコンピューターで子どもたちが家で調べてきて、学校にそれを持ち寄る。例えば英語ですと、can の使い方についてみんな調べてきて、持ち寄り、マニュアルを作って共有する、というようなことが子どもたちができるような、学びを深めることができるような、ファシリテーターとしてのスキルを身に付ける仕組みとしていくことが必要ではないか、ということがメインの話でした。

もう1つは、難関大学に入れることが重要なのかということです。難関大学に入れることが目的ではなくて、難関大学に入ることは個人の人生だけでなく、社会でどのような役割を果たすのかということも含めて、しっかりと社会を作るという視点から難関大学を地域として、福島県として目指すことが必要なのではないか、という話になりました。難関大学に入れることが目的ではなく、個人だけの問題ではなく、ということです。以上2点話をいたしました。

ありがとうございました。次に、Bグループの小檜山委員、お願いいたします。

それでは、Bグループの話し合いについて御報告いたします。

まず、項目1に出た意見について、今の社会は成果主義になっている。大企業でも生き残れず、倒産する会社がある社会になっている。また、コロナで、更にテレワークで、会社に行かない社会が予想されている。その中で、ヒューマンスキルを高めるような教育、豊かな心といいますか、思いやり、人と人を繋げる人に、そのような教育が必要なのではないか。自己肯定感に関しては、人権尊重の精神の涵養といいますか、学習についても必要ではないかとの話になりました。

項目2については、地域の中で学んでいく、地域でどうやって生きるかということと、A班からもありましたが、難関大学への進学もあります。小学校と中学校、中学校と高校の連携など、難関大ではなく、農業ならば農業の、工業ならば工業のスペシャリスト、そういう意味合いでの人材育成が必要なのではないか。A IやICTの活用については、A Iに負けない子どもを育てていく。デジタルとアナログを使い分けて、と段々議論がよいところになってきたところでした。

今会社で活躍している人は、失敗経験を克服してきた人たちである。予測ができない社会になっていますが、失敗経験をうまく克服させるような教育ができないか、との話がありました。以上です。

ありがとうございました。次はCグループ、丹野委員お願いいたします。

私たちのグループは、私が文化財担当、それからスクールソーシャルワーカー（以下、SSW）の先生、それから新聞社の方、学校の先生と、立場がそれぞれ異なりましたので、いろいろな話題が出ました。

私たちが目指したい教育の姿は、他県にはない、「福島らしい」魅力のある教育です。それは内に籠ってしまうことなく、ローカルとグローバルを調和させた学習、あるいはあらゆる世代の人々や文化財など、地域の全てを巻き込んだ教育でありたいと思います。そして、B班からもありましたが、失敗することを許す、そしてそれを活かすことができる教育、失敗を恐れなくてチャレンジしていく心を育むということも大切にしたいと思います。その上で多様性を許容する社会を作っていくことができる教育、さらに震災以降社会の急激な変化に対して、自分で考え対応していくことができるような教育を「福島らしい」教育と考えました。

そのために一番の問題は何かと考えたときに、教員の資質であるということに

内田座長
小檜山委員

内田座長
丹野委員

内田座長
青砥委員

辿り着きました。授業時数の確保などといった問題もありますが、教員に時間が無い、研修をしたい、学びたいという教員の意欲に対して、学習機会が失われている実態があるのではないかと、あっても非常に少ないのではないかとということが問題点として挙げられると思います。そのためには、教員の研修の機会を保障するような働き方改革、教員のもっと学びたいという意欲を汲み上げられるようなシステムを作っていく必要があるのではないかと考えました。例えば、要支援の生徒に対して理解を深めなければならないことは喫緊の課題でありますし、英語等教科教育について教員の資質を上げるための研修や、生徒指導・進路指導等に関するスキルを上げる研修、地域のことを学んだりそのために地域の方と話をしたりしたいという時間、そうした機会を教員に保障する、そのようなシステムを作っていくことこそが必要ではないかと話し合いました。以上です。

ありがとうございました。最後にDグループ、青砥委員お願いいたします。

青砥です。宜しくお願いします。Dグループは、小野委員が報道による現場の、伏見校長先生が小学校の、私が高校の、それぞれ異なる立場から意見を出して議論を進めてまいりました。大きく2つのテーマについて話しました。

1点目は、小中高一貫した教育を実現すべきではないかということです。伏見先生からは、中学・高校になると、小学校でできたことができているのか観察できないという意見を、私からは前回第1回会議で提供いただいた読書量のデータについて、小学生は右肩上がりです。読書量が増えていますが、高校生は1冊とちょっとしか読んでいないという意見を出させていただきました。小学校で教えていることと、中学校で教えていること、高校で教えていることに、今メッセージとして違いが出てしまっているのではないかと、という問題意識を共有しました。高校生が本を読んでもおらず、教養や文化が軽んじられていないかと感じています。小中高の教育目標が、今バラバラになっているならば、きちんとつながるような検証をしなければならない。

小中高大でアンケート調査をしていると思うが、1人の児童生徒が、小学校のときにこうだった、中学校ではこうなった、高校ではこうなった、大学ではこうなったというように、1人の児童生徒がどうなったかの追跡調査があって良いのではないかと考えています。

似たところで、中高一貫校も県内にいくつか設置されています。これから郡山地区にできるという議論もあると思いますが、中高一貫校が目指していることと、中高一貫校ではない他の学校がやっていることに差があってはいけないのではないかと感じています。中高一貫校のメリットがあるならば、中高一貫校のない地域の学校でも行うべきだろうとの意見がありました。同じように、小中一貫で、小規模校で義務教育学校を設置している市町村もあるかと思いますが、メリット、小中一貫でできていることがあるのであれば、他の小学校、中学校へフィードバックすべきとの意見が出ました。小中高一貫した教育を実現したいというのが1つ目のテーマです。

2つ目は、対話的な学びの実現について話しました。

小学校では、福島県は30人学級が実現できていると思いますが、普通の全日制の高校では1:40の授業がほとんどだと思います。これからアクティブ・ラーニングや対話的・主体的な学びをしていく中で、1:40で一人一人の生徒の進路指導や学びを実現していくのはなかなか難しい。やはり、現状、教員が抱えている仕事大量にあるので、どの部分が教員以外に任せられることができるのか、一度整理し

内田座長

でも良いのではないかと意見が出ました。小学校段階では生活指導や進路指導、家庭教育のサポートに時間が掛かり、授業づくりに時間が割けない、中高段階では部活動指導に時間が割かれて、教材研究に時間が掛けられないとの課題があると思うのですが、どの部分を教員がやるべきで、それ以外のどの部分を学校以外の地域の方、あるいは大学の力等を借りるべきなのか、という議論を整理して行っていくべきではないか、と話し合いました。以上でございます。

ありがとうございました。

どのグループも、時間が足りなかったのではないかと思います。いろいろキーワードが出たかと思います。子どもの姿であったり、先生の姿、対話的な学びなど教育技法的な話もありましたし、テレワーク、AIという時代の流れの中でどのように学校や教育が変わっていくかという話もあったかと思います。学校間、学校種間の連携もありました。現時点では、何か1つの結論に向けて議論をまとめる段階ではなく、皆さんのそれぞれのお立場で見てこられたこと、これまでの経験を踏まえながらアイデアを出していただく段階だと思っております。前半のワークショップで出せなかった御意見でも良いですし、今各グループの意見に触発されて、こんなアイデアというのでも結構ですので、皆様から御意見をいただきたいと思っております。一巡して、1人2～3分程度で御意見をいただければと思っております。名簿順にと考えておまして、偶然青砥委員が連続となりますが大丈夫ですか。

大丈夫です。

それでは、青砥委員から名簿順に、1人2～3分程度でお願いいたします。

青砥でございます。グループの発表をしながら、私も言いたいことを言ってしまったので、続けてになってしまいますが、重なるところでは、一人一人の生徒の追跡調査ですね。小中高の、学校や教員の評価はあると思うのですが、1人の6歳の福島に生まれた子どもが、18歳になった時にどんなことができるようになったのかということを中心に評価して、それまでの教育課程に問題・課題等がある場合には、改善のための工夫をしていく。私も矢祭町に生まれましたが、白河市の白河高校の教育を受けて18歳になった、一人一人の人生は学校単位で動いているわけではなく、一人一人のキャリアで人生が進んでいます。小中高一貫した教育実現というところとなるわけですが、そこをフィードバック、評価する仕組みがないように見受けられます。高校の中だと、eポートフォリオといって、高校1年からの実績をきちんと評価しようという流れが大学入試の中ではありますが、それを小中から一貫したもので、福島独自のものを作るなどもあり得るのではないかと感じているところです。

対話的な学びについては問題意識をもっているところでして、高校での探究活動を今年度も引き続き支援していますが、1：40の授業でアクティブ・ラーニング、総合的な探究の学びをしていくのは限界があると思っております。一方で、総合的な探究の時間だけではなく、対話的な学びを学校生活全体の中で実現したいとも考えています。なので、探究の授業はもちろんですが、例えば部活動、今は先生がすべての部活の顧問をする体制だと思いますが、その地に博物館があれば、博物館の先生が考古学部等を作って顧問を担当していただくとか、地域で活発なサッカークラブがあるのであれば、クラブのコーチの方に顧問に就いていただく。教員の仕事のうちどの部分に外部の人材に入っていくのか、一律ではなく、各学校や地域ごとに差があると思うので、多様な地域の人材活用の在り方が保たれる全体計画やメッセージが必要なのではないかと思っております。

青砥委員
内田座長
青砥委員

内田座長
安齋委員

次は、安齋委員にお願いいたします。

福島民報の安齋と申します。今回から、この懇談会に参加させていただきます。よろしくお願いいたします。

少し自己紹介をいたしますが、福島市に住んでおりまして、子どもが24歳、22歳、20歳です。上の2人が長男、次男ですが、県外の大学に行っていましたが、この春県内に就職しました。一番下が長女で、現在福島大学に通っておりまして、家族全員福島県にいる状況です。こういった懇談会で、私が発言できることは、普段の取材活動を通して教育に関して感じていることになると思いますが、少しでもお役に立てればと思います。

柱となる話については、グループ発表の際に丹野委員から発言いただいた内容に、私の意見も含まれておりますので、枝葉になるかもしれませんが、新聞社的な感覚から1つお話をさせていただきます。

県外から、人を呼び込めるための教育水準を保つことが大事だと思います。今、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、地方に関心が集まっていますし、福島県では震災・原発事故からあと半年ほどで10年となりますが、今後5年間の復興関係予算は福島県で1.1兆円が見込まれていて、その1つの重点となるものが移住促進であると復興庁は話しています。そういう意味では、福島県ではこれから多くの人を呼び込む機会が増えてくる状況ですし、人口は都道府県、地域そのものの力とって過言ではないと思うのですが、子育てをしている世代に福島県に移住していただく時には、どの位の教育レベルにあるのかというのは、移住をする上での1つのポイントになるのではないかと思います。そういった視点も教育の計画には必要なのではないかと思います。

内田座長
小野委員

ありがとうございました。次に、小野委員お願いいたします。

一言でまとめると、いろいろお話を伺ったことを参考にしてみると、やっぱり教員のスキルなのだと思う。そこをどう高めていくかが、今の福島県の状況に尽きると思う。有名大、一流大に上げることが全てではないのは当たり前だが、一方でこれから少子化の中で、分母が少なくなる中で、福島県や日本を担っていく人材のスキルは高いに越したことはない。リーダーをしっかり育てなければならない。そのためには、育てられる教員が必要。一方で、地域の産業なり実情は、複雑な社会を生き抜く力をつけた人材もたくさん必要なので、そうした教育に対応できる先生も必要。その意味では、オールラウンドに全てを1人で担うのではなく、ニーズに応じたスキルを持った教員が必要とされていくのだと思う。いただいたデータの中で、年齢構成等を見ると、これから求められる環境に応じた世代の先生が少ないのだろうと、教員も高齢化しているのも問題で、今後どう確保していくかを、私としては1番の問題意識としていました。

内田座長
黒川委員

ありがとうございました。次は、黒川委員お願いいたします。

先程発表させていただいた続きとなりますが、私が教員となって34年位なのですが、この30年で学校で変わったことはたくさんあるなかで、授業のスタイルが全然変わっていないとは言いませんが、1番変わっていないと思います。知識伝達型が主流である。そこをAIが担うとすると、かなりのエネルギーが必要だけれども、例えば教員養成、採用後の研修、学校の仕事内容と組織の在り方、学校だけではできないことがあるので、社会の中、学校や地域で子どもを指導していただく方々、子どもたちが様々な大人たちと接することの大切さがあると思いますが、何にせよ、大きく教員の担うべき役割が変わることを教員一人一人が自覚して、一半沢

内田座長
小檜山委員

直樹のドラマで、一人一人が危機意識を持って少しずつ身を削りながら組織全体を変えていく、というのが同じだと思いましたが、そういった意識を持てるような教員の在り方が大切だと思います。

私も現場の人間ですので、今の大きな変革の時期、そして未来を見据えた教育の在り方を理解してもらって変わっていく、どう変わっていくかも理解してもらえるような努力をしていきたいと思っています。

ありがとうございました。続きまして、小檜山委員お願いいたします。

それでは、私は資料4に基づきお話したいと思います。

3頁になるのですが、個々の生徒に応じた対応ということでまとめていただいて、事務局案の不登校生等の「等」が入ると、他県のように外国人の子どもの就学や帰国してきた子どもの就学部分まで含めるのか、含めるならばそこまで入れ込んでおかなければと思います。発達障がいについて、資料3-2の現状分析にもあるのですが、本県では平成30年5月時点で、小中学校、高校、私立を含めて全県調査をしております、特別支援教育センターで取りまとめておりますので、そういったデータを基に裏付けをしておかれると良いのではないかと思います。

特別支援教育ではここ10年、福島県では順調に進んできております。児童生徒数も増えているイメージがありますが、資料3-2の81、82を見比べるとわかるのですが、増えているといっても小中学校では全国平均まではいっていないので、ようやく全国並みになってきたのかなということで、子どもたちが手厚い支援、丁寧な支援を受けられる状況が整っていると解釈したほうが良いのではないかと考えております。以上です。

ありがとうございました。続きまして、齋藤委員お願いいたします。

私はB班にいまして、皆さんのように子どもを教える立場というよりは、生徒を採用する企業側の立場なので、企業側からのお話をしたいと思います。

コロナ禍で大変だというのは皆さん御存じだと思うのですが、東京の大手さんはほとんど通勤がない状態で、1週間の内半日だけの出社で、定期も取り上げられてしまっています。その日行った分の実費精算となっていて、その中でのテレワーク、例えば私は廃炉、中間貯蔵に関係しているので、福島事務所、東京本社等と会議をしますが、多くの方は自宅から参加する形になっています。企業もとても厳しい状態に置かれています。会社としてどう生き残っていくか、統計からいうと1960~2010年の一部上場企業の生存率と、2010年からの生存率を比べると、大きく落ちています。1960~2010年では、90%が生き残っていたのですが、今は大体60%位しか生き残れない状態になっています。最新の統計を取ったらもっと酷いことになるかと思っています。経営者同士が集まって話すときに、どういったことになるかという、今日のための経営なのか、明日のための経営なのか、境界を守るのか、それとも境界を超えて新たな領域へ入っていくのか、もしくは意図的な一貫性、伝統を守っていくのか、それとも非一貫性を訴求していくのか、かなり重要な状態になってきています。今までは同じものを長く生産しても、1つのプロダクトが10年、20年と売り上げを保っていたが、今は例えば新しい携帯電話を作っても1年しかもたない状態で、どの位までお金を掛けられるか、きちん訴求しないと企業に儲けが残らない時代になっています。安定・確実からダイナミズムにどうやって踏み出していくのかは、なかなか難しい問題です。今、一部従業員はテレワークをしていますが、時給とか日給ではなく、拘束時間で給与が支払えなくなるので、完全に成果給になります。テレワークの会議で一言も発言がない、建設的

内田座長
齋藤委員

な意見がない場合は、会社への貢献度0という評価になります。つまり、これから求められる人材が大きく変わってきています。企業が生き残れるかは、新しいサービスと、探究の中からのリスクテイクや、失敗から学べる学習にかかっているといっても過言ではなく、こういったことをきちんとできる人材が欲しいというのが実際のところですよ。

今の子どもたち、新入社員もそうなんですが、ネット同士の会話は慣れているんですが、人と直接会うと突然主張できなくなってしまう、会話ができなくなってしまうという、ヒューマンスキルが落ちてしまったような子どもが多いので、ネットワーク、テレワークの時代ではありますが、逆にヒューマンスキルが非常に求められるような状態になってきていると感じます。我々の評価のポイントとして、学校で多様な人の中できちんともまれてきているか、難しい課題を解決してきたかということを質問の中で重視していますので、そういった回答を準備できる生徒さんを採用する形をとっています。

不確定要素、新しいことに踏み込んでいくのは、非常に怖いことだと思うんですが、こういったことに果敢にチャレンジできること、自分が思ったプロジェクトを人に対して説得できる状態に自分の頭の中を持っていけるかも重要なので、説得力も大切にしています。

学校で学ぶことには限りがあって、先生も忙しくてなかなか外に出れないと思うので、今会社としては学校以外のところ、例えば遊びや家庭教育など、きちんと教育としてとどめている中で、重要な位置を占めるだけの勉強をしてきているかが重要で、例えば新人研修でキャンプに行ったときに、焚火の準備ができるか、焚火をしたことがあるか、ナイフを使ったことがあるか、とても大事なのですが、今はこれらの経験をしている子どもが少なく、危ないことは親がやってくれるとか、失敗しないように先回りしてくれた、という人がとても多いんですけれども、こういったことが今後の教育にとっても重要なのではないかと考えています。以上です。

ありがとうございました。続きまして、高瀬委員お願いいたします。

高瀬です。宜しくお願いいたします。

前回の会議で、不登校となる1つの要因として、主に発達障がいからくる2次的障がいとしての不登校について、お話させていただきました。今回は、震災を機会とした心のケアが必要な子どもがまだ存在していることについて、SSW、福祉的な立場から見たこととお話しさせていただきたいと思います。

10年経ちますが、震災における様々な課題は続いていると言われていています。実際にはどんなことかと聞かれると、ストレスや心の問題で不登校になっているお話は出るのですが、具体的にどういうことか把握できていないことが多いのが現状だと思っています。問題行動があるとされた子どもたち、困った子どもの背後には、保護者の養育姿勢や養育能力、そういったものを含む家庭環境の問題や家庭を取り巻く地域社会の問題、経済的な問題等いろいろありますが、これらは震災前にもたくさんあったケースで、震災後新しく発生したことではないとは御承知だと思います。また、これらの問題は地域にもよりますが、福島県では会津・中通り・浜通り、特に南相馬、双葉郡、いわき市では、地域ごとの課題はありますが、震災後に変ってしまった子どもを取り巻く環境の変化が、子どもたちに大きく影響していると思っています。

震災により、家庭を取り巻く環境が変わったことによって、養育上の問題がある家庭では今までの価値観が変化してしまった。価値観が変化することによって、更

内田座長
高瀬委員

に放置してしまう、ネグレクトがエスカレートしてしまう、また家庭の中でそれが容認されていく、そういったこともあります。あるいは、保護者自身のストレスがより大きくなって問題が重症化したり、養育能力で支援が必要な家庭が一杯あったのですが、震災によって地域からの見守りや支援、親族・知人からの支援が喪失してしまいました。そうした喪失により、サポートする環境が激減したことも事実です。

更には震災によって家族の構成、生活環境が変わったこと、経済的な変化は保護者にとって大きなストレスとなってきました。子どもたちは、これらの諸問題を抱える保護者から大きな影響を受けているので、心の不安定を招いて不登校という行動が現れたり、愛着障がい等で今でも問題行動といわれる行動を起こしているのが現状です。

今回のテーマ、教育の目指すべき姿については、私の場合は学習とか家庭指導、教育指導という視点からではなく、いろいろな環境の子どもたちがいて、様々な問題を抱えている子どもたちがいて、発育過程にも大きな差のある子どもたちがいて、その背後には問題を抱えている保護者がいる、ということを経験者の先生に多くに理解してもらい、またその理解に差が出ることがない教育現場であってほしいと思っています。その上で、それぞれの家庭環境、保護者の思い、問題等を教職員や関係者との連携・協働によって、一人一人に合った生活指導、学習指導ができるように、子どもたちの学校生活を支えていける教員の育成と、環境づくりを希望したいと思います。これは、人権教育にも繋がることですので、目指すべき教育に掲げてもいいのではないかと思います。以上です

ありがとうございました。それでは、丹野委員お願いいたします。

文化財保護審議委員の丹野です。

私も、皆さんのお話そのままそうだなと思いますが、それに付け加えるならば、私は文化財保護の立場の人間として、それは文化財への保護にも当てはまるということをお願いしたいと思います。例えば、現行の学習指導要領の中では、郷土のことを学びましょう、ということが様々な教科の中で謳われています。積極的に芸能保存会の方などが動こうとするのですが、校長先生の方針によってガラッと変わってしまう。昨年はよかったのだけれども、校長先生が変わったら全然違ってしまふ、というような話を聞きます。それぞれの学校の校長先生の方針があることは勿論当然ですし、それは校長先生の権限なのですが、せめてその地域に文化財を通じて学校に関わりたいという人たちがたくさんいるんだということと、その人材をうまく活用する方法があるといいのかな、といつも思っています。ただしその際に、注意しなければならないと思っていることが1点ありまして、あくまで学校でやる以上、教育・学習活動であることを忘れてはいけないと思います。どこかのおじさんが来て楽しいことをやって面白かった、では教育ではない。先程の外部の人材をどう受け入れるかという話にもなりますが、外部の人に対しても、学校にこのような生徒がいますとか、こういう方針で学校を運営しています等ある程度基礎的なことは、外部から入ってくる人にも理解しておいてもらう必要があると思います。そうでないと、学校を混乱に陥れて終わってしまうことになりかねない。仮にも学校で教えるんだ、子どもたちの前で何かをやるんだという以上は、教える側の地域の大人も、学校や子どもたちについて理解しておく必要があるのかと思います。これは、特に民俗芸能の保存会の方が今頑張っているところなので、そういった活動を潰さないようにするためにも、外部の人たちをどう受け入れていくのか、受け入れやすい体制をどう作っていくのか、ということを考えていく必要があるのかと

内田座長
丹野委員

内田座長
成澤委員

考えています。以上です。

ありがとうございました。それでは、成澤委員お願いいたします。

いろいろなお話がありましたが、教育の最終目的とは何か考えてみました。

私が子どもの頃は、昔は川で遊んだりしましたが、今は学校から遊んではいけない、近づいてはいけないと、確かに危険性もあるので仕方がないが、学校では教えられることもある。昔は上級生等が、同じ川の場所でも流れの速さや深さ、危ないところなどを教えてくれた記憶があります。今は、教員は学校でベースとなることをしっかり教えなければならない。それを基に、それを発展させるために教員が導いてくれるのだと考えています。

難関大学への進学率のお話が出ていました。グループワークの中で話したことでもあります。私も高校の頃は行きたい大学ではなく、行ける大学を選んでいました。偏差値を基にどこに行くかを考えました。ただ、やはり自分が行きたい大学に行かないと、学ぶ意欲が薄れていくということを大学に行って感じました。難関大学には様々な魅力があると思います。パンフレットなどで情報発信をしていますので、知ることはできると思いますが、それではわからない魅力もまだまだある。実際に大学に行った身近な人にお話をしてもらっただけでも、行きたいという意欲が出てくるのではないかと感じています。

福島県の魅力は何か、前回の会議の中でも自己肯定感などありましたが、福島県のいいところを発展させていければいいのではないかと思います。

ありがとうございました。それでは、伴場委員お願いいたします。

ありがとうございます。私からは3点ほどお話しします。

今、私はNPOの立場で、県の方で現在20校程県立高校での事業をさせていただいて、そこから感じたことです。他の委員の方からもお話にありました、学校の先生の変化についてその通りだと思いますが、私から見ると現場の先生方はとても御苦労されているな、非常に大変な立場であると思います。真面目にやろうとしています。では、これを解決するためには何が必要なのかというと、私たちが今やっていることは重要で、戦略だと思います。教育委員会や、教育長であったり、どの方向に向かうのかということに対して強いメッセージを作ることが本当に必要だと思います。その中で、今回のSWOT等は、ベースとしては良いと思いますが、また辛口になってしまいますが、もう一層、二層位の分析が必要なのではないかと思っています。具体的には、Weakness と Strength のところで、家庭学習の習慣が増えている、増加傾向であることはプラスで、事実であると思います。家庭学習の習慣は増えていて、それで全国平均を成績が劣っているのは、非常に大きい問題なのだと思います。これは、クロスで分析するとクリティカルな問題だと思います。問題は、何で施策を行ったうえで成績が低いのか、しっかりと考えるべきだと思います。そういった分析をしないと、今までとあまり変わらない施策になってしまうので、そこをまとめていくべきだと思います。

もう1つ、これからどうしていくのかという戦略の話でいうと、資料2のSociety5.0のところに書いてある、マイケル・オズボーンさんの「雇用の未来」にある、47%の職業が10～20年でなくなるという私の好きな論文ですが、もう1つ論文の追加があって、齋藤委員と全く一致すると思うのですが、仕事は47%がなくなりますが、ただ逆に47%の仕事が生まれるということは事実で、問題はなくなる仕事で求められる能力と、これから新しく生まれる47%の仕事で求められる能力が違うということだと思います。私は、実はもともと銀行員でして、銀行

内田座長
伴場委員

員は確実になくなる仕事です。余談になりますが、学校の先生はいまだに銀行員は良い仕事だ、と言ってしまおうと思う。でも、AIのもっとも奪いやすい仕事が銀行員だと思います。そのギャップがあるんです。逆に、その事実を知ったうえで、教育として取り組むべき分野は、オズボーンさんは簡潔に述べていて、学び続けることができる能力、OSが変わり続ける訳ですから、新しい知識をどんどん入れていかないと企業は生きていけない時代になっている。さらに、違いに対して分析する能力が必要であると。

さらに言うと、自分の意見が正しいということではなく、協働して相手の意見を取り入れながら、ベストソリューションを作り得る能力が必要になると思います。これらの部分をどうやって教育に入れ込むかという仕組みづくりが、これから取り組まなければならないことだと思っています。企業ではR&B、開発とリサーチになりますが、その素地を高校、教育で作り込むという視点に立ったらどうなのだろうか、と私は思っています。

もう1つ、たまたま先週N高という通信教育の方とお話する機会があり、共有したのですが、私もまだ情報を呑み込めてないのですが、これはまさに黒船だなと思いました。多分地方の、今私たちは会津の奥地の高校にも入らせていただいています。そこの高校に行くよりもN高に行く方が良い、という結論はすぐ出てくるだろうと思います。通学せずに、自宅から質の高い先生の授業を受けられる環境や動きが、このコロナの影響で更に早まりました。そことどう折り合いをつけるかということも含めて、ネットでの配信の授業がもう目の前に来ている時代の中で、本県の教育をどう作っていくかを考えると、更に今回のこの10年間の戦略作りの意味合いは非常に重くなってくるのではないかと思います。以上です。

ありがとうございました。それでは、伏見委員お願いいたします。

渡利小学校の伏見でございます。

このような会議で、いろいろな職業の方からお話を聞くと、自分自身の考えが広がります。私の立場からいうと、6歳から12歳の子どもを日頃目の前にしているので、どうしても思考がそこで止まってしまって、その子どもたちの先、10年後どのような大人に成長してほしいのか、どのような大人に成長させなければならないのか、時々忘れてしまい、目の前のことを追ってしまうんです。ですから、長い期間、10年間のスパンを考えるのであれば、福島を担うどんな人材を私たちが育てていきたいのかが、大前提にくるのではないかと話を聞きながら思いました。

グループ討議の中で、私はDグループで、青砥委員が先程お話しされましたが、小中高一貫した学力向上を進めていくにはどうしたら良いのか、資料を見ますと中学校数学・英語で苦戦している結果が出ていますが、それでも中学校もできる限りのことを頑張っていると思います。でもその中で、もっと小学校の時にこういうことを積み重ねていけば、中学校で見える学力がもっと身に付くのではないかと、高校からすれば中学校でこういうことをすればということではないかと、大学ではこうではないかと、上から下を見ればある程度やってほしいことがはっきりするかなと思うので、学力向上の面からでも、もっと小中高大の繋がりが重要だと感じています。

もう1つ、小中高大と私たち教員が繋がらないといけないのは、これからの福島子どもたちを育てていく、先程から教員のスキルの向上の話がありますが、福島の教員を目指す若者を増やしていくにはどうしたらいいのか、現場でも危機感を持って話をしているところです。今までは、大学の方に声をかけるだけで採用試験を受ける若者が増えるのではないかと考えてきた。でも今は大学だけでなく、高校や中

内田座長
伏見委員

学校にも教員の良さをもっとPRしていけないと駄目なのではないか、その子どもたちが教員採用試験を受ける年代になって教員を目指してくれる、そのような人を増やしていく、私たちが力を合わせた若い人たちへの関わりが、最終的には教員のスキルを上げていく。これから10年間、今福島県の教員は高齢の方も多いのですが、そこがいなくなったときに、福島県の教員を支える若い人たちの力が是非必要ですし、そうならないかれば福島県の教育がこれからどうなってしまうのか不安があります。採用者を増やしていくことも、スキルを上げることと一緒に考えていきたいと思えます。

先程伴場委員から、学び続ける能力、分析する能力、相手の意見を取り入れベストアンサーを考える能力の話がありましたが、小学校でも主体的で深い学びとして、お互い意見を出し合って話し合う力、コミュニケーションをとる力を育てていかなければならないと考えているところです。そういったところも、小学校、中学校、高校、そして大人へと繋がる求められる力だと思います。

今回コロナのことで、オンライン教育が大変話題になっておりまして、福島市でも各校にオンラインに関するアンケートを行いました。本校の保護者の意見では、オンライン教育は素晴らしく、学校に通えない時に教育を行うことは、子どもたちの学力向上にも繋がる、ただしそれだけではなく、先生方と顔を突き合わせて学ぶこともある、特に小学校時代はそういうことから子どもが学ぶことはたくさんある。保護者の方は、子どもたちには例えば善悪の判断や思いやりの心、人と自分が違っていいこと、多様性を小さいうちから学んでほしい。小さいうちに学ぶことだと私も思います。ですから、オンライン教育の良さと、人と人が顔を合わせる良さ、そういったものを分析されて、しっかり位置付けていくと良いのかと思えました。以上です。

ありがとうございました。次に、森委員お願いいたします。

現場を抱える1人の理事長、校長として、常々思うことは、魅力ある学校とは何だろうかと考えます。魅力のある学校には魅力のある生徒がいて、学力向上しながら部活動にいそしんで実績を上げ、友人関係を育て、生徒が生き生き楽しく過ごせる学校だと思います。しかし、生き生き過ごす生徒を育てるのは教員なので、行きつくところは教員にかかってきます。先程からの皆さんからの意見に同感です。

例えば本校の例ですが、採用した教員を、指導力がないからクビとはいかないので、とにかくいろいろな研修をして育てます。学校独自の初任者研修は年4日、中堅教員研修、これは学校で選んだ教員になりますが年8回研修をしてもらいます。本校は、7つの習慣というたぐいまれな授業をしております、そのファシリテーター養成を毎年4～5人、一週間缶詰で研修してもらいます。その他に、学年は1つのチームですので、学年研修は非常に大事だと思ひまして、外部のコンサルタントを呼んで年5回、学年をチームとして育成していただいています。その他教職員の全体研修を定期考査ごとに実施しておりますし、県が実施している私学研修、あるいは東北の私学研修にも積極的に先生たちを出して、とにかく先生たちを成長させる、これが組織を活性化して成長させる1つだと思っています。もちろん会社も人、学校も人です。教員で学校はものすごく変わってしまうので、もっと先生方に学ぶ場、研修の場を与えてあげることが大事なのかと感じました。そのためには、働き方改革にも繋がっていくのかと思ひます。

先程N高という話がありまして、箱形の既存の全日制の脅威となるものが、この通信制学校です。我々私学関係者は脅威と思ひておりまして、特に東京の私学の志

内田座長
森委員

願者がどんどん減少しています。その代わりN高や通信制が物凄く伸びているんです。学校に行かなくても済むわけですから、そういった生徒の人気を集めている訳です。恐らくこのN高のモデルとなったのは、アメリカのミネルバ大学だと思います。キャンパスを持たないで全国、全世界を回って4年間で学んでいくミネルバ大学、ハーバードを辞めて入学する学生が出てきたそうです。物凄い人気を博している。これをモデルとしていて、公私立を問わず、通信制学校が我々全日制の本当のライバルとなってくることは間違いないと思います。ただし、通信制高校を管理しているのは文科省ですが、文科省が認めてしまっていてできているのですが、その管理を恐らくされていないために、やりたい放題は語弊があるかもしれませんが、そういった状態になっていて、生徒の人気が出ている負の側面もあると思います。ただ、コロナ禍の中で、オンライン教育とこれまでの全日制の教育がどのように絡んで、コラボレートしていくのが、1つの論点になるのだろうと漠然と思っています。以上です。

内田座長
渡部副座長

ありがとうございました。それでは、渡部副座長お願いいたします。

私たちが目指す子どもたちへの教育は、持続可能な社会の担い手を育てる、という大きな目標があると思います。その中で町として、先程小中高連携の話がありましたが、ESDを基にしたキャリア教育を連携して取り組んでいこうと進めています。本格的に今年度高校が探究活動をやっているところですが、小中では連携して研究授業を行い、お互いに授業を見せ合って意見を交わしたりしています。そういう中で、小中高が一貫して目指す生徒像を持つことが大事だと思います。今までのお話にも出てまいりましたが、自分の考えをしっかり持ち、他と協力し意見を求めながら、より良く課題を解決していこうとする力かと思ひ、教育研究会の中でも話し合っています。

まず小学校では、地域の中で、地域の人から伝統芸能や自然を学び、そこから誇りと愛情を育てることによって自己肯定感を高めたり、向上心を高めることに繋がりたいと思います。また、地域の人にも子どもたちが感謝の気持ちを込めて学びを発信することによって、地域の方にも元気になっていただき、これを中高でも広げていきたいと考えています。地域の良さを学んでから、発達段階にもよりますが、課題を見つけ、自分たちの故郷をよりよくするためにどうしたら良いか、地域に発信しているところです。

また、地域から世界に向けて、環境問題など大きな課題が自分たちの生活に及ぼす影響や身近な災害から世界の課題に向けて自分たちができることは何かと考えながら生活したり、解決していこうという意欲を高めることが大切かと思ひます。これは、先程の話にもありました、日常の授業の中でも課題を自分事として捉えて、解決していこうという、主体的に解決していける力が必要です。なので、教師の指導力、授業の工夫などが必要です。連携して授業研究などしていますが、これからもお互いに切磋琢磨し合える教員として、子どもたちに目指すべく能力を付けさせることができるよう、教員一人一人が自覚しながら、子どもたちが社会で幸せに生きていくために、どういう教育の在り方が必要なのか考えながら、取り組んでいます。皆さんの意見がとても参考になりました。ありがとうございました。

内田座長

ありがとうございました。申し訳ありませんが、5分ほど時間が過ぎてしまいました。もし次の御予定などある場合は、御遠慮なされず御退出ください。

本日は、皆様から本当に様々なフィールドから御意見を賜りました。福島県ならではの現状ですとか、良いところ、課題もあったかと思ひます。そういったものを

	<p>もう1度事務局と相談させていただきながら、更に深掘りできるように、次回に向けて準備をさせていただきたいと考えております。</p> <p>この機会に何かこれだけ言い忘れたですとか、これだけは言わせてほしい、といった御意見がございましたら、お一人、お二人位は大丈夫ですが、よろしいでしょうか。</p> <p>(特に意見なし)</p> <p>そういたしましたら、今日の意見交換は以上とさせていただきますして、先程申しましたように、もう1度整理させていただきたいと思います。</p> <p>事務局から何かありますか。</p> <p>本日はありがとうございました。</p> <p>今後の予定についてですが、次回開催は10月頃を目途に調整させていただきたいと考えておりますので、後日改めて御連絡させていただきます。</p> <p>また、本日時間の都合上、十分御発言いただけなかった内容や、後日お気づきになられた内容があれば、8月末日までにメール等で事務局までお寄せいただければと思います。</p> <p>議事録につきましても、作成後、御確認をお願いさせていただきますので、よろしくお願いたします。以上でございます。</p> <p>高瀬課長、ありがとうございました。</p> <p>今アナウンスがありましたが、メールでも御意見を受け付けているということですので、今の段階では皆様お一人お一人からのアイデアですとか、それぞれのフィールドでお感じになられていることを幅広く出していただく段階だと思っておりますので、何かございましたら御提出をいただければと思います。</p> <p>それでは、本日の協議はこれで終了させていただきます。</p> <p>審議に御協力いただきまして誠にありがとうございました。</p> <p>－閉 会－</p> <p>事務局</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>これもちまして、第2回第7次福島県総合教育計画策定に関する懇談会を終了いたします。お暑い中、熱い御議論をありがとうございました。</p>
--	---